

うも弱いようだ。また case study であるにもかかわらず、他の後進国の経済発展についての比較的考察が全然払われていない。さらにまた、本書執筆にあたって、あるビルマの前閣僚が、“Make your book really critical. Only in this way you can help.”といわれたのにもかかわらず、あまり critical でない。とくに政府統計の信頼性にかんする吟味がなされていない。

だから、この10ヵ年のビルマの経済発展にかんする資料集ともいうべきである。パイ教授の研究にくらべると、まったく無味乾燥な読みづらい本である。しかし、この点に本書の長所があるといえよう。少なくともビルマの経済発展にかんする研究のためには、必ず読破され、しかもその資料が十分に利用されつくされなければならない文献である。この意味で、1962年度のビルマにかんする出版物として、パイ教授のそれと相ならんで2つの重要なものだといえよう。

(本岡 武)

Lucian W. Pye, Politics, Personality and Nation Building, Burma's Search for Identity, New Haven and London, Yale University Press, 1962, xx+307.

ビルマ研究にかんする最近の業績として、MITのパイ教授の本書は、まさしく白眉のものであると思われる。政治学専攻でない評者として、軽々しく本書を批評することができない。しかし、わたくしは、そのビルマの政治過程なりビルマ人の性格を分析するあたりを読みながら思わず膝をたたかざるをえないのであった。

パイ教授は、かってマラヤのゲリラ戦にかんする興味ある分析を著わされて著名であるが、教授が1958—59年、ちょうどビルマの第一次軍部独裁のころ滞在、広般なインタビューをもととし、心理学・文化人類学・社会学および政治学の理論と方法とを巧みに駆使して、ビルマの政治・性格および国家建設をとりあつかったのが本書である。これは、MITのCenter for International Studiesの研究成果として刊行されている。

本書は7編からなる。まず国家建設の分析の理論および方法の概説からはじまる。つぎにビルマの伝統的秩序とその変貌。これをうけて、ビルマの政治におけ

る精神と計算。さらにビルマの社会分析。この2編の総合としての政治的集積過程と変化への反動。最後に新しいビルマの展望となる。

問題の焦点は、非西欧的・伝統的な社会が近代的な国家を建設するにあたっての諸問題をビルマを事例として分析することにある。

もちろん本書は多くの問題をかかえていて、簡単に批評することはできない。ただひとつわたくしに最も印象的だった点だけをあげよう。それは著者のビルマ観、あるいはビルマ人についての理解が、少なくともフェーニバル以来の伝統的な考え方とは、いちじるしく異なっている点である。いいかえると、ビルマの、あらゆる面での二元性をきわめて率直に、明快に指摘している点である。あるビルマ研究の若い婦人——彼女のビルマ観が主として文献ではぐくまれた——がわたくしに語ったことをつけ加えておきたい。彼女は、本書の校正刷をビルマに渡るまえに通読した。そのとき、ことごとくに反撥の念をおさえることができなかった。ところが、ビルマに1年あまり滞在し、実際にビルマの社会に接したところ、パイ教授のいっていることも当然だと思うようになった。これは、まったくの挿話にすぎないが、本書はあまりにも率直に分析されてあるだけに、読者をして同感と反撥、さまざまの気持をいだかせる。

ビルマ政治の専門家でなくても、またその専門がなにであろうと、ビルマに関心をいだく読者にとっては、きわめて興味深い、また挑撥的な著作である。わたくしはビルマの参考文献として、ぜひ一読をすすめたいと思う。(本岡 武)

Clifford Geertz, The Religion of Java. Glencoe, The Free Press, 1960 pp. 386

シカゴ大学に、新興国の研究というプロジェクトがある。著者のGeertzは、そのdirectorであり、近年、インドネシアに関する多くの秀れた研究を発表している人類学者である。ジャワ全体の社会構造に関する彼の見解は、インドネシアの政治史学者Harry J. Bendaや社会学者W. F. Wertheimによって、高く評価されているが、その基本構想が、この書物で詳細に展開されている。従って、「ジャワの宗教」という書名は、必ずしも、この書物の内容を適確に伝えるものではない。